

地藏尊の宗教

⑦

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

あの世とこの世のあいだを守るほとけ

日本において地藏尊は、生きていく子供には健康な成長を授け、亡くなった子供にはその靈魂を守ると信じられてきた。数ある地藏尊の功德の中でも、生死を問わず子供を守ることは、もともと広く日本人のなかで受容されてきた。

しかし、前回述べたように、地藏尊に関する經典には、地藏尊が子供を守る菩薩であるとする記述がない。具体的には、『地藏本願経』や『閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経』のような伝来經典のみならず、日本で成立した『延命地藏経』にすら、子供と地藏尊の関係が見いだされぬ。

このように表面的には仏教の「ほとけさま」で

には解明しがたい日本固有の地藏信仰を明らかにしてきた。

先に見た『地藏和讃』に歌われた賽の河原も、日本独特の思想である。仏教民俗学で優れた研究を残した五来重によれば、賽の河原とは「墓地のような死者の世界と、人間の住む娑婆世界との境界に、靈魂の往来を塞るための積石をした場所」であり、もとは「塞の河原」であったと推定している(『石の宗教』講談社学術文庫)。靈魂の往来を塞るのは積石であったり、また石棒を立てることもあり、それが道祖神の起源となった。その道祖神に顔や袈裟衣を彫刻することによって石地藏になったという。したがっ



八王子市内妙薬寺境内の伝・子育て地藏尊
摩耗して判読しがたいが舟形光背銘に貞享三(一六八六年)と見える

て石地藏とは、図像や仏画や木彫の地藏菩薩を石像化したものではなく、もともと石の持つ宗教性が転じて石地藏になったものと考えられている(同)。また、民俗学者の大島建彦は、境界に「さへのかみ」と呼ばれる神がいて、人々のところに悪霊の入るのを防いでおり、それと道祖神や地藏尊が習合して日本における複雑な系統の信仰を形成したとしている(大島建彦『道祖神と地藏』三弥井書店)

日本人は古来、死者の靈魂を恐れたが、なかでも非業の死者のそれを恐れた。ブツダの教えでは、善き行いをすれば当人に善き結果がもたらされ、悪しき行いをすれば悪しき結果が自らに及ぶとされた。これを善因果悪因果とよび、業とは行為のこと

人を癒す音楽

セッション歌手 友納あけみ

暑さ寒さも彼岸まで：言葉通り、陽射しはすっかり春めいて来ました。桜の蕾も心なしか膨らみ、もうすぐ美しい季節がやってきます。

六年前の今頃！北国の人達は厳しい冬の寒さから、やっと解放される日々を待ちわび胸を膨らませていたはず。あの日の震災はそんな人々の夢を無惨に砕いていきまし

た。春を待つ心騒ぐ時が、あの年から辛く哀しい鎮魂の日になってしまいました。未だに、復興は捗らず、たくさんの重い課題が残されたまま：そんな東北から、ひとつのドキュメンタリーが届きました。「音楽に何ができますか？」と題されて、仙台フィルハーモニー管弦楽団の団員達が震災直後から五年に渡って楽器を片手に被災地を

回る日々が記録されていました。最初は衣食住も足りてなく、まして家族の安否さえわからない場所に音楽なんて！と何処かやましさと大きな不安を抱えて避難所に向かった団員達も、音楽を聴きながら止めどなく涙を流す人々の姿に！「被災以来初めて、泣いても良いんだよ！と言われた気がした！」「ひと時、苛酷な現実から忘れられ久しぶりにゆったり息が吸えた気がする・・・」の言葉に！音楽の力に気がつかされていきます。

実は自分達もやっていった音楽には本当に人を癒した、生きる為の心の糧の様なものを与える力があるんだ！音楽をやっている良かった！自らも被災を経験して、今、生きて音楽ができることの有難さ、それが人の心を動か

せる感動！全ては極めて神聖なもの様に思え深く真摯な気持ちで一杯になったさうです。

震災は計り知れない多くのものを奪っていきました。だからこそ、残された私達は、その中から生きていること！命について、それぞれの立場での課題を深く学び、考えなくてはいけない気がしています。季節は春を迎え、多くの自然の恵みをもたらされます。この恵みと同じ様に音楽は神様からの素晴らしい恵み。改めて身の引き締まる想いを感じています。

コンサートのお知らせ
六月十五日(木)
友納あけみコンサート
「讃歌」
会場 渋谷区・さくらホール
時間 開場十八時半
開演十九時
お問合せ先
TEL 〇三三三三三三九〇七

ある。しかし災害や事件・事故を見るまでもなく、現実には立派な人が無残な死に方をすることも多い。このような業によらない死を非業の死とい、通常とは異なる悲惨な死を横死という。日本において非業の死者の靈魂は、「祟る」とか「浮かばれない」と信じられ、妖怪となつて生者を襲うと恐れられた。それを鎮めるために行つたのが「祀り」、「調伏」であり、「供養」であった。真言宗をはじめ多くの寺院で修される施餓鬼会にも、横死者の供養、鎮魂の意味が含まれている(金岡秀郎『文学・美術に見る仏教の生死観』NHK出版)。本来の仏教では「祟り」を説かぬから、これもまた日本の宗教といつてよい。

五来重によれば、定命でない夭折死による子供の死も非業の死であり、その霊は「御霊」として恐れられたという。こうして御霊がこの世に戻ってきて祟りを起こさぬよ

うに塞るのは「塞神」としての道祖神の役割であったが、これを地藏尊、なかでも六地藏が引き継いだ。こんにち墓地の入り口に六地藏石仏が立つているのはそのため、墓地から荒び出る「荒魂」を塞るために置かれた「ガードマン」とされた。こうした役割を持つ六地藏は高野山奥の院に建立された中世以来、江戸代には各地に立てられ現代に至っている(『石の宗教』)。六地藏はインドや漢民族の仏教には見られず、日本固有の信仰と考えられているが、六と数字は仏教の説く六道輪廻に基づいている。生きたし生けるものは解脱しない限り、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六道を無限に転生し続ける。その六道それぞれで地藏尊が死者の靈を守り、同時に生者がその霊に襲われぬよう願つて、遺族たちは墓地の入り口に六地藏を建立したのである。